

地を潤すもの



曾野綾子

潤すもの

曾野綾子

地^ちを潤^{うる}すもの^お

一九七六年四月二〇日 印刷
一九七六年四月三〇日 発行

著 者 曾野綾子

編集人 桑原隆次郎

発行人 伊奈一男

発行所 毎日新聞社

〒一〇〇 東京都千代田区一ツ橋
〒五三〇 大阪市北区堂島上
〒八〇二 北九州市小倉北区紺屋町
〒四五〇 名古屋市南区堀内町

印刷 中央精版
製本 大口製本

地を潤すもの

夜、七時少し過ぎに新宿についた汽車（今の若い人々は正確に、「電車」というのかも知れないが）から下りて、私（水島譲）は八時少し前に、奥沢の自宅に帰った。

土産は笹子餅である。妻と二人、餅は今日中に食べなければ硬くなるものだから、量が多すぎると困ると思ったが、幸いにも、昨秋以来の物価高で、包みの内容が少なくなったような気がして、むしろほっとしたのである。

「雪は如何でした？」

と妻が聞いた。

「大したことはない。今年は、例年よりは今までのところ、むしろ少ないくらいだそうだ」

六十五歳と六十歳の夫婦ともなると、会話はどうしても短くなる。だんだん喋らなくても、相手がわかっているような気がするのも変なものであった。妻のほうも、「笹子餅」の包みを見ただけで、お茶を沸かしに立った。眠る前に食べるのはよくないという説もあるが、私はもう何年も、ほんの一口甘いものを食べて寝る習慣である。若い時は酒を飲んだ。それが次第に量は減り、胃潰瘍をやった

のをきっかけに、酒量を少しずつ減らして甘いものを食べる習慣ができた。もっともこれらは、いずれも精神を宥^{なだ}めるため、という感じがする。

「ダムはいかがでした？」

妻は、茶を淹^いれて来ると尋ねた。

「この寒いのに、皆で土運んでるんですか？」

女は社会を知らないから、致し方ないのかも知れないが、ダム工事というと、未だに人間がもつこを担いでいると思ひ込んでいる。

「雪が降っているから、今、外の土工事は、あまりやっておらんのだ」

私は言った。

「その代り、トンネルを見せて貰って来た」

「だってダムじゃなかったんですか」

「ダムにはトンネルがつきものなんだ。ダムを作っている間、川の水を他へ逃してやらなければならないからね」

「そういうものでしょうかねえ」

私を、信州のダム現場へ連れて行ってくれたのは、或る大手の建設会社の役員をしている男である。私は昔、電鉄会社へ勤めていた頃から、彼をよく知っており、最近時々ゴルフ場で顔を合わせる。たまたま私が、本家の法事で、糸魚川へ行くことを聞き、自分がダムの視察に行く日がちょうど、その帰り頃に当たっているので、近くで温泉に入り傍々^{かたがた}、見て行かないかと誘ってくれたのであった。

「雪でもトンネルの仕事はできる訳ですね」

「ああ、全く関係ない」

「いかがでした？」

妻にそう言って促されなければ、私はダムを見た印象などを妻に語ろうとしなかったかも知れない。昔と違って、トンネルの断面が大きいからね。それと、人間が、これっぽっちでいいかと思うほど少ない。人間を多く使うと、金もかかるし、事故のもとになるからね。機械にだけ働かせて、人間を現場におかなきゃ、人身事故はなくてすむ訳だ。もちろん、これは理論だがね」

「ロボットが掘るようになりますかねえ」

妻は何も知らないから、トンチンカンなことを言う。

「おもしろいことを聞いて来たよ。今度のトンネルなんか山がよくて、くずれて来そうもないから、支保工の間に矢板やいたなんぞいなくてもいい所が多いというんだ。矢板やいたってわかるか？」

「わかりません」

「ダイナマイトで岩をくずした後、支保工と呼ばれる柱を立てる。その隙間から小さな岩石の破片が落ちて来るといけないので、普通はその間に、昔風の木の林檎箱をバラしたような木っ切れを、挟み込む。それを矢板やいたと言うんだ」

「それがいらないんですか」

「ああ、岩がんがいいから、殆どいらないと思われる所も多い。それでも、やってる」

「なぜですか？」

「働く人間の不安感をなくすためには、それだけの無駄をしたほうがいいんだそうさ。物の考え方が心理学的になって来てる」

「けっこうなことですねえ」

「まあ、そうだな。帰りに会社の運転手がこぼしてるんだ」

「何て？」

「今年は宿舍が寒くていけない。石油危機以来、会社が燃料を節約しているから、って言うんだ。それで、どれくらい寒いんだって聞いたら、去年までは、シャツ^{じゅつ}ーで掛物なくても寝られたけど、今年は、ちゃんと毛布と布団くらいは掛けなきゃ、なんて言ってる」

「飯場はそれほど待遇いいんですか」

「そうらしいね。完全暖房で、自分の家へ帰ると、寒くっていけないんだそうだ。風呂だって、銭湯並みにはきれいだし。小さいところは知らないけど、大手の労務者は恵まれるようになったよ」

「ああ、そうそう、あなたが、出られて間もなく、真野^{まの}新平^{しんへい}さんから電話がありました」

「何だって!？」

「何だか、とても困ってたようで、母が入院していて、入院したことをお知らせしろ、と言うから、お電話は申し上げるけれど、決して危険な状態だとか、そういう訳じゃないんだから、見舞に来て頂かなくてもいいし、お忘れ下さい、というんです」

「どこが悪いんだろう」

「それがよくわからないんです。血圧も不安定だし糖尿の気もあるから、と言うんですけどね。あの^あ人、病気になるのが好きな人でしょう」

妻の声には、多少、悪意がこめられていないでもない。

「いや、気味が悪いな」

「何がです？」

「山の現場で、あの女のことを考えていたんだ」

「へえ」

「先刻言った完全暖房の労務者宿舎を見せられた時だ」

設備がいいのは風呂ばかりではなかった。谷に入って仕事をしている建設会社の大手二社が共同で作ったという一般労務者用の食堂は、職員用のより立派で、調理室なども外科室を見るようである。自動皿洗機、米とぎ機まである。

「そこに一人、下の町から働きに来ている賭婦^{まかないふ}がいたんだ。長靴はいて、白い割烹着かけて、髪に白い三角布かぶってきりきり働いてる。それが真野菜々^{まなえ}枝にそっくりなんだ」

「そんな年の人が働いているんですか」

「いや、若かりし日の、さ。もっとも、その賭婦^{ひと}に、《失礼だけど、あんた年幾つだ》って訊いたら、《三十一歳だ》って言ってた」

「変に思われたでしょう」

「訳は言ったさ。知人にあまりにも似ている人がいるんで、と説明した」

「その賭婦さんは、どういう人なんですか」

「やっぱり、未亡人なんだそうさ。旦那さんは農家だったんだけど、心臓病で死んで、子供二人、婚家先へ預ける形で、自分一人働きに出て、仕送りしてるんだそうさ。なかなかきれいな女だった」

「菜々枝さんも、若い頃はきれいでした？」

「お前だって知ってるじゃないか」

「でも、三十代の初めは知りません。あの一家は九州かなんかにいたでしょう。私が初めて見た時は、もう四十歳くらいになってましたからね」

「まあ、似たようなもんだらう」

私は無責任な言い方をした。

「その賄婦さんはいい女だったね。私は菜々枝さんが団と結婚していれば、こんなだったか、とふと思ったんだ。化粧なんか何もしてないけどね。雪どけの水で洗ってるんで晒されて白くなったような顔の色をしてた」

団というのは、私より九歳年下の、たった一人の弟であった。彼が死ななければ、菜々枝は恐らく団と結婚していただろう、と思えたのであった。

「私が菜々枝のことを言って、『あなたはその女の若い時に瓜二つなんだ』と言ったら、彼女は、『その弟さんと結婚する筈だった女の方はその後どうなさいました』と訊くんだ。『いや、彼女は別の、地方の大きな材木商の息子と結婚して、その夫にもやはり先立たれたけど、息子が一人いる』と言ってやったら、『でもその方は、経済的に困っていらつしやらないでしょう』と言うから、『山を少し持つているらしいから、食うだけは何とかやれるように、本家が考えてくれてるらしい』と言ったら、『そこが違います』と言うんだ。その賄婦の人は、休みの日に山を下りて婚家先へ帰ると、子供が母ちゃん……と言って両側から飛びつくんだそうだから、菜々枝より、ずっとしあわせかもしれない私は思ったんだがね」

「菜々枝さんには、そんなに慕われるところはありませんよね」

妻は、いささか突き放したような言い方をした。

見舞に行く閑がないというほど時間に追い廻されている訳でもないので、私は、三日ほど後に、山で買ってきた山菜の燻詰を土産に、病院に見舞に出かけた。私は今、昔いた電鉄会社と関係のあるトラック会社の顧問をしているが、いわば閑職にあるのである。

病院の受附まで来て、「しまった」と思った。真野菜々枝は何科に入院しているのか聞いて来なかったのである。血圧が高いとか糖尿があるとか言うのなら、内科だろうと思うが、内科にはそんな入院患者名はないと言う。

「神経科なら、そういう人がいますかねえ」

受附の男が眼鏡の奥から言う。

「多分それでしような。そうざらにある名前じゃありませんから」

私は驚いたような、驚かないような曖昧な気分だった。急患で運び込まれたので、まともな空部屋がなく、神経科にとりあえず入れられた、ということがあるのだろうか。

神経科は一階の一番奥だということであった。廊下に冬の陽ざしが暖かい。私はふと、あの菜々枝によく似た主婦が働いていた炊事場の軒に、一米もありそうなららが厳しく下っていたことを思い出した。この病院は廊下にも暖房がしてあり、独特の——まるで病菌が麴に変質でもしているような生温かい甘い臭気を持っている。

神経科の入口はごく普通の防火ドア風のものであったが、来訪者はインターホンで、内部と話をするようになっていた。私が来意を告げると、ドアはすぐ内側から、看護婦の手によって開けられた。

狂人の咆哮もなければ静かなものである。葉々枝は一番奥の一人部屋にいる、と教えられた。

「面会しても、よろしいんでしょうか」

私は躊躇った。

「よろしいですよ、どうぞ」

何が悪いかわからない、という調子の若い看護婦の表情である。途中でレクリエーション・ルームらしいものの前を通りかかった。カラー・テレビがあつて、若い娘や老人の患者がおもしろそうに見える。

ドアをノックすると、肌全体に粉をふいたように見える葉々枝の顔が、枕の上にあつた。

「どうしました」

私は尋ねる。

「びっくりなさったでしょう。格子戸の中で……」

「流行歌にありましたよ。格子戸をくぐり抜け……というのが」

気がついてみると、やっと窓の外に、鉄の格子がとりつけられていたが、ここは一階だから、神経科でなくても、これくらいの防護はあるかも知れない。

「いったいどこが悪いんです。神経科に入れられるくらいなら、もう少しおかしくなきゃいかんでしょう」

私は小さな椅子に腰を下ろした。

「私ね、自殺未遂をしましたの」

明るい声であつた。

「何でまた……」

「私が悪いんですよ。それはよくわかってます」

五十半ばの女が、少女趣味のネグリジェを着ている。

「新平が、一週間ほど前に、結婚を考えているかも知れない、という女の子のことを、口にしたんですよ」

「新平君は今、二十……」

「二十五歳ですよ、もう」

「それじゃ、女友達がいけないほうがおかしい」

「そうよ、それはわかってますのよ」

何が自殺の原因なのか、まだ私には見当がつかかねた。

「新平にいくらガール・フレンドがいたって、私、平気でしたのよ」

「それじゃ、その中の一人が当然、結婚相手としてクローズ・アップされて来るでしょうな」

「ええ、それも、わかってるつもりでしたのよ。だけど、新平からうち明けられた日、足許の地面がくずれるようだったんです。私ね、一人になるんですもの。そうやって一人で生きることには耐えられない、と思ったんです。本当にね、新平が、私以外の女と心を許し合って生きるようになるなんて……そんな事態に直面するくらいなら、私、生きていたくなかったんです」

マシユマロじみた顔が、梅干しのようにきゅっと縮んだ。タコの体の一部を見るようで、私は恐れをなして凝視していた。

「なぜ、失敗したんですか」

葉々枝が嬉しそうに「私ね、自殺未遂をしましたの」と言った時の表情を思いふながら、私は尋ねた。普通ならいたわって訊けないことでも、その言葉に対応して構わないのなら、何とも訊けるという感じだった。

「さあ、わかりません。私はもう何年も睡眠薬を飲み続けてますから、薬も溜めてあって、かなり飲んだつもりなんですけど。いつも飲んでるから抵抗力があったのかも知れないって先生はおっしゃるのよ」

私は黙って、煙草に火をつけた。病人が煙草を喫くんでいるらしく、灰皿が枕許にあったからである。「気がついた時、私が、『今度は失敗しましたけれど、この次は、絶対、まちがいなくやりますわ』って言ったらうれしいのね。それで、内科のほうで恐れをなして、こちらへ移し変えてしまったんですよ」

「どう、恐れをなしたんです？」

「だって、内科は四階なの。それで、窓にとくに格子もないでしょう」

私は微かすかな吐き気を覚えた。私は女の、こういう甘え方に遭あうと、やはり生理的に耐え難くなる人間の一人である。

「それで、今でもまだ、やる気なんですか？」

「はっきりとはわかりませんよ。今となっちゃ、薬を飲んだ時の気分だって醒めた時の気持だって、正確には言えませんが。只ね、私、新平には、後から言ってやったんですよ。『ごめんね』って」

「そうですな、充分、謝られることですな」

「私ね、やり損って本当に悪かったと思っただんです。『今度、やる時は必ず、まちがいなくやるから

許して頂戴ね。あたしがいたら、あんたは道をふさがれてしまうものね」って、私謝ったんです」

私は、二、三秒間、黙っていた。それから、

「ま、当分、ここで静養することですな」

と言った。

「ええ、私、ここ、わりと気に入ってますのよ」

菜々枝は、私の言葉を何ら正確に受けとることもなく、又もや、甘い陽気を見せて言った。

「もっと、本当に気違いみたいな人ばかりかと思ったら、ちっともそうじゃないんですもの。本当は午前十時半から十一時半までと、午後二時から三時の間、箱をくみ立てる軽作業があるんですの。私、それに出たいと思ってるんですけど、まだ体力が恢復してないでしょう。脚がふらつくもんで休まして頂いてますけど、そんな所では、皆とっても楽しそうなんですよ」

「血圧と糖尿はどうなんです」

「ええ、それも、前々からですから。これでもケーキは頂かないようにしてますのよ。和菓子だけ、時々こっそり食べてしまうことあるんですけど」

「新平君は時々来ますか」

「会社がけっこう忙しいでしょ。それで昨夜はまいりませんでしたけど、今日は来るんじゃないかと思ってるんですけど」

「あんまり、期待しないほうがいいんじゃないですか？」

私は余計なことだとは思ったが、思わずそう言った。

「今、どこの会社も、七時に社員を帰らせるとは思えませんからね。皆、十時、十一時なんだ。病院

へ寄るために、早く帰ってくれるだろうなんて、若い者に期待しちゃ、酷だよ」

「ええ、ええ、わかってますのよ。ですから私は、そのためにも早く死んだほうがよろしいのよ」

私は何も言わなかった。それがいかに、ひと困らせな、愚かしい考え方かということをこの女にわからせることは、この際最も必要なことなのではあるが、私は冷たい人間であるのかも知れなかった。世の中には、一人の人間として救えることと救えないこととある。

三

私は、妻にも、菜々枝の状態をはっきりとは話さなかった。妻は前から菜々枝が嫌いである。甘ったれで、胸が悪くなるような女だという。死んだ団さんが——つまり私の弟が——よくあんな性格の女を好きになりましたね、と言ったこともあった。

団が生きていた頃、菜々枝は——当時は、新海菜々枝しんかいといったのだが——決してあんなような女とは見えなかった。もちろん萌芽はあったのだろうが、それは私には見えていなかった。菜々枝は団より二つ年下で、女学校を出て稽古ごとをしていた。父の新海氏は銀行屋で、菜々枝はその一人娘だった。

あの頃の二十歳の菜々枝と、今の五十四歳の菜々枝と変らないところは、みごとな富士額だけである。もう今の年では、そろそろ、女といえども、額の両脇が少しくらい抜け上ってもいい頃なのだが、菜々枝にはその気配もない。髪を黒く染めているので、本当に若々しく見える。時々、白髪染めを赤っぽく染めているひとがいるが、あれでは却って、染めていることがばれてしまうのである。菜々枝はそういうことに、ひどく勘がいい女である。